

創刊110周年記念

誇れるふるさと

24地区リレー

〈vol.10〉

〈神原① 特徴〉

宇部市の中心部に位置し、真締川河口近くの東側流域に広がる。面積は1.3平方キロで市内最小だが、市役所や警察署、消防本部など主要な行政機関の拠点が数多く立地している。商業地と住宅地が混在し、生活インフラは整っている一方、地区内に小・中学校が無いという珍しい特徴もある。

市内最小も主要な行政機関が立地



由来は小字の「上原田」

今から約200年前の地区周辺は、人の住んでいない湿地帯と砂原が広がっていた。現在の新川地区との境目となる真締川は江戸時代、樋ノ口(現在の山口大医学部周辺)で直角に曲がって居能の海に注いでおり、たびたび氾濫が発生。1798年、21代領主福原房純が疎通工事を行って川を真つすく南へ流した。「新



基本データ

- 面積1.3平方キロメートル (24位)
- 世帯数1843世帯

- 人口5401人 (15位)
(男性2548人、女性2853人)
- 高齢化率34.7%
- 小学校児童数334人
- ※世帯数などは2022年4月1日現在

川」は川周辺の地域を現す地名となつて人が住み始め、土地の守護神として東岸に中津瀬神社が建立された。同神社の春の

農具市が、現在の「新川市まつり」に発展している。50年代には宇部新天町名店街を中心に多数の商店街がつけられ、県内初の動物園「宮大路動物園」も誕生。商店街の

東新川の土地に「神原」の名が最初に使われたのは、1903年に現在の寿町2丁目付近に掘られた坑口に、小字名の「上原田(かみはらだ)」から2文字を取って「神原炭鉱」と命名した時といわれている。同炭鉱の鉱区総面積は約165平方メートルにも及び、当時における宇部の三大炭鉱の一つだった。近年は地区内にマンションなどの集合住宅が多く建設され、人口は2010〜14年にかけて増加。その後は減少傾向にある一方、一人暮らしの後期高齢者の割合は年々増えている。18年には市内唯一の百貨店であった井筒屋が閉店し、加速する市街地の活力低下が市復興の都市計画で幅50メートルの常盤通りが造られるなど、急速に基盤整備が進んだ。50年代には宇部新天町名店街を中心に多数の商店街がつけられ、県内初の動物園「宮大路動物園」も誕生。商店街の

石炭鉱業の発展に伴って各種工業も発展し、かつて白砂青松だった一帯には次々と人家が建ち、市街地を形成。太平洋戦争末期の空襲で地区一帯は焦土と化した。戦災復興の都市計画で幅50メートルの常盤通りが造られるなど、急速に基盤整備が進んだ。50年代には宇部新天町名店街を中心に多数の商店街がつけられ、県内初の動物園「宮大路動物園」も誕生。商店街の